N 君の場合

N 君は入所持の年齢、四歳二か月。言語障害を伴う知恵遅れ。某病院の診断によれば、脳波検査の結果、大脳の言語領域に異常があり、そのために言葉が出ないとのこと。IQ65。

異常に気づいてから、いろいろ治療を受けたが効果がなかった。どこの相談でも、来年の幼稚園入園までに言葉が出ないようでは、むずかしいことになるとのこと。言語障害のため、二人の兄とも遊べず、情緒面でも問題が見られる。……記録抜粋。

私は N 君の両親に対して、次のように言いました。

「私は、N 君が生まれてからまったく言葉を使わないできたということが、大脳の未熟という異常をもたらす原因だったと考えます。だから、言葉が使えるようになれば、大脳も正常になると思います」

右の考え方の中に私の考える教育の基本的な姿勢があります。それは、子供の能力に限界線を引かない、ということです。

「このような子供は、これくらいにしかならない」という考え方を捨てなければ、その子の可能性を発見し、伸ばすという教師の姿勢は生まれないと思います。

もしも、「以前この子によく似た障害児は、いくら指導してもあのくらいにしかならなかった」というなら、「この子もあのくらいにしかならないだろう」と考えないで、「その指導法が悪かったからではなかったか」と、その指導法に原因を求めて、子供に原因を求めるべきではない、と思います。

「幼稚園入園までに言葉が出ないと、むずかしいことになる」という考えは、過去の経験から出た判断でしょう。私たちも、同じような経験をしてきた思い出はありますが、そういう考え方は、やはり限界線を引くもので、反省しています。

また、このように言われた親の身になってみますと、当然、焦りも出て来ますし、事実、焦った結果、N 君が食事中、何か言葉らしいことを言ったということで、「もう一度言ってごらん」と親が強制し、そのため食事を皆中止して、N 君の口元を凝視するという異常事態を招いたということです。

こうなりますと、N 君はいよいよ黙否する態度を強めますし、以後の教育に大変な支障を招くだろうと思われます。このように焦りは教育

には禁物ですが、その原因は限界線を引いたことにあるわけです。

それで私は、N 君が話せるようになる時期を小学校入学時まで、二年先に延ばしました。そうすればまだ二年半あるということで、両親もゆったりとした気持になるだろう、と考えたからです。そして、「何としても言葉を出させよう」という気持を、すっかり捨て去ることまで希望しました。それは、良くしようと思えば思うほど、結果が悪くなることが多いからです。

五十年十月十七日

○　アスクミーにカードを通し、それらしく言う。帽子はボーシと言った。そして「チ、チ」と言う。「家にある」ということらしい。

○　色紙で飛行機を折る。キイロという言葉ははっきりしている。現在までに言えた唯一の言葉。

○　甘やかされているらしく、わがままで、集中力が不足。

十月二十四日

○　アスクミーを喜んでやる。カードを機械に通すたびにそれらしく言う。

○　目、手、足、口のカードは、音読しながら体の部分とつなげる。

十一月一日

○　目、手、足、耳、口のカードを見て、「メ、テ、ア…シ、　ミミ、クチ」と声を出して読む。

○　象、犬、牛、馬、猫のカードを使って、読みながら取りっこをする。

○　鼻と自分の名前のカードとをおみやげに渡してやると、大事そうに持って帰る。

十一月八日

○　自分の氏名のカードを見て、一語一語発音できた。

○　蟻、蜂、蛙、蝶、蝉のカードを音読しながら取りっこをする。特にこのカード取りは、注意力を必要とするが、抵抗も起こさず、むしろ楽しそうに遊んだ。

十一月二十四日

○　両親の話によると、研究所へ来るのがとても楽しみで、来る時の目の輝きが普段とまるで違うと言う。

○　体操しながら、「目、手、耳、口、足、鼻」を正確に言う。

○　「ノソノソ、ピクピク、パクパク、ブラブラ、ピョンピョン」のカードを渡すと、熱心に見て、「これなあに」と聞き、先生の言う通り真似しようとする。

○　自分の氏名はすらすらと言えた。

十一月二十一日

○　「猫、鶏、象、豚」のカードを読んだり、当てっこしたりする。発音が大分はっきりしてきた。

○　電話で一語文の会話をさせる。既習のカードを拡げて、先生と互いに読み合ってカードを取る競争をする。

○　二語文への指導を始める。「僕の本、パパの自動車」の“の”の指導をする。

十二月五日

○　父親が嬉しそうに話す。「家でＮ君が欲しがる物をやらなかったら、“パパ、の、ばか”と言ったので、家中皆で大笑いした」と。

○　「電車、三鷹、相模原、自動車」のカードを読みながら取りっこをする。

十二月十三日

○　接続語“と”の指導をする。「手と足、黄色と赤、白と黒、パパとママ、目と鼻、耳と口」言える単語を“と”で結んだのだが、全部上手に言えた。

○　○両親が「この子が言葉を言えるとわかって、本当に安心しました」と言われた。

○

○　十二月二十日

○　○　「青いボール、赤いボール、黄色いボール」のカードと実物と比べ、投げたり、転がしたり受け取ったりして遊ぶ。

○　　以上、二か月半、週一時間の指導で、かつて言葉が出ないと診

断されたＮ君が、二語文が言えるようになったのです。こういう例は決してＮ君だけではなくて、言語脈害の子供たち全部早い遅いの違いはあっても、言葉が言えるようになっていきました。従来の言語治療に対して大きな疑問を感ずる所以（ゆえん）です。

○　と同時に、漢字のようなむずかしいものを覚えたり理解したりするはずがない、と限界線を引かれていた障害児が、実は皆、この力を、普通児とまったく同じくらい持っていることがわかったことは、ほんとに嬉しいことでした。

○　「言葉が満足に言えないのに、文字の指導なんてとんでもない。指導には段階があって、言葉が先だ」とお考えになっている方が、ほとんどのようです。確かに指導は段階を追って進めるべきですが、その段階がどうも間違っていたようです。“話し言葉”よりも“書かれた言葉”の方がやさしいのです。

○　また、「言葉や文字よりも、先に身につけるべき生活習慣や集団の社会性がある」と言って、この教育を非難される先生がいらっしゃいます。本当にそうだと、心から信じていらっしゃるのでしょうか。お伺いします。

○　私の指導の経験では、生活習慣や社会性に問題のあった子が、言葉や文字を理解し始めるや否や、突然のようによくなっています。私には今の公教育は逆のことをやっているように思えてなりません。以上が公教育の場に対する私の質問です。

五十一年三月三十一日

○「箸を持つ、ジュースを飲む、ズボンをはく、靴下をはく、服を着る」のカードを与え、アスクミーに通して言ってみたり、拾い遊びをする。

○ 童謡と関連させて、「兎、魚、雨、雪、象……」等十枚ずつのカードを、かるた取りの要領で取りっこをした。

三月二十七日

○　「バスに乗る、おなかが空いた、雨が降ってきた、手を洗う、早くおいで」のカードをアスクミーに通して言う。

○ 日常会話には、大分不自由さがなくなった。

○ 幼稚園入園は断わられたとのこと。園長先生のお話では、情緒障

害がその理由であるという。障害の判断の基準について考えさせられることである。

四月三日

○ 「お風呂、熱い、茶碗、箸、布団、寝る、枕、パジャマ」等のアスクミーカードを使い、ごっこ遊びをしながら読む。

四月十七日

○ 風邪を引いて先週休んだので、「病院、お医者さん、注射、薬」のカードを使って、N 君をお医者さんにして病院ごっこをする。

○ お店ごっこをする。「ごめんください、いくつですか、ありがとう、さようなら」のカードを使って買い物ごっこ。

六月十九日

○ 父親の話によると、「今週一年ぶりで〇〇病院の検査を受けてきました。言葉が出て、ある程度会話ができるのに驚かれ、IQ が 85 に伸びました。一年前の検査では特殊学校行きであったのが、普通学級でも大丈夫だと言われました」と。

○ たくさんの言葉が、とてもはっきりと言えるようになった。

右のカードを読んで、いろいろ組み合わせて、正しい文にする。

○ 「熊、鶏、金魚、蟻、猿、蟹、蛇、兎、蝶、亀、鳩、蛙」等のカードで、かるた取りをする。

七月一日

○ 先週から三歳児の幼児教室に通う。元気に毎日行っているとのこと。

○ 指導中、自然に使った言葉。

「もう我慢できない、待ってて、電車でなく自動車、ごめんね、ママ早く帰ろうよ（指導後、母親と教師の話が長引いたので）」

○ スズメの“ス”、ワンワンの“ワ”、カラスの“カ”等、最初の音がなかなか出ない。ワがアになって、ワンワンがアンアンとなる。

七月十日

○　言葉が大分言えるようになったので、家庭でも言わせることが多いせいか、研究所でも、言うことにちょっと抵抗があるようだ。親に無理に言わせようとしないよう、改めて注意した。

○　「象、亀、蟹、蜂、蝸牛」のカードに、元の絵のあるマグネットを合わせて貼り、数を数える。

○　だるま落とし遊び。「赤、白、緑、黄」の文字カードと、色を合わせて、言いながら落としていく。

○　親指姫の話を聞かせ、登場人物を言わせて、これをカードと合わせる。

九月七日

○　二語文で話すことが多くなった。

「電車、乗って来たよ。お父さんと、来たよ」

十月九日

○　市内の幼稚園に欠員があると聞き、簡単なテストを受けた結果、入園を許可される。

○　母親の話。

「幼稚園に喜んで行き、帰るとすぐに遊びに行くようになった。友達と会話が交せるようになったので、友達もふえ、行動範囲も拡がり、性格ものびのびしてきた」

○　先生との会話の中で言った言葉。

「暑いなあ、もう大丈夫、今度またやろうね、今度来たら、御飯もね、ママと電車で三鷹来た、まあだよ、さか（さ）ま、僕おばちやん（先生）好き」

十一月六日

○　入って来るなり、「三回、先生の夢、見たよ」と言う。会話に不自由がなくなり、相手の目を見てはっきり話すようになる。

十一月十三日

○　平がなが大体読めるようになった。漢字も一音一音のように指を指して読み、変だなという表情をする。

○　Ｎ君が読んだ最初の文。

『小さい白い鶏が、皆に向かって言いました。「この麦、誰が蒔きますか」豚は「いやだ」と言いました。猫も「いやだ」と言いました。犬も「いやだ」と言いました。小さい鶏は一人で麦を蒔きました。（以下賠、原文通り）』

特別に平がなを一字ずつ覚えさせるような指導はいたしません。しかし、文字カードがたくさん読めるようになると、障害児でもどんな子供でも、自然と平がなが読めるようになります。

また文章になった場合は、どの平がなも読めるようになっていても、一字ずつだと読めない子がいます。それが、短時間の指導で、直ちに一字ずつでも読めるようになります。

文字の指導は、『あいうえお』一字ずつの読み書き指導から入るよりも、漢字を中心とし、平がな、片かなを合めた、意味のある“書かれた言葉”の読み方から入ることです。それが自然の姿であって、何の抵抗もなくよく覚えてくれるのですが、これがなかなか学校の先生方には、わかってもらえません。

Ｎ君は、この「小さな白い鶏」を、何の抵抗もなく、二十分ほどで読めるようになりました。

五十二年三月二十九日

○　家から持って来た音読できるカード。

「親指、白い雲、ゆりかごの歌、刀で切る、松の木、神さま、寒い寒い、王様、右手を上げる、絵の具、象さん、交通信号、きれいな声、日本一、止まる、歩く、歩く牛、走る馬、太い首、電話で話す、青い目、動物、新聞を読む、力が強い、耳で聞く、大好き、お母さん、男と女、黄色い花、お当番、お父さん」計三十一枚。

以上、指導を開始してから一年四か月にわたる指導経過の概略を紹介しました。もうＮ君は小学校入学の能力は充分にあるのですが、五歳ですからもう一年待たなければなりませんでした。その一年間は、いろいろな本を読むこと、数の概念を理解させ、文字を書くことを習う等、当初の目的である言語指導以上の内容を学習し、それをこなしていきました。

しかし、問題として残ったことは、会話のイントネーションが完全にはならないこと、歌唱で音の高低表現ができないことの二つで、これはもう一年指導を早めていたら良くなったのではないかと思います。

でも、小学校一年生になった現在では、それも大分良くなってきています。五十二年十二月の末、父親が、「毎年正月になると、親類の子供たちが大勢遊びに来るのだが、今まではこの子の言葉が通じないため、どうしても除け者になって、淋しい思いを親子ともども味わって来ました。けれども、今度の正月は、皆と一緒に遊べます。本当に正月が待ち達しい思いです」

と言われました。五十三年の正月は、N 君の家にとって、それはすばらしいものだったと思います。

N 君は、言語障害から来る知恵遅れと、そのため友達と遊べないという劣等感で、情緒にも問題がありましたが、一対一の指導の結果、比較的短期間に良くなりました。

与えられた紙数の関係で事例もわずか、指導記録も抜粋ということで、『石井･ドーマン方式』についてのすべてのご理解はとてもむずかしいと思いますが、これでお許しを得たいと思います。

後日、機会がありましたら、『石井･ドーマン方式』を中心とする研究所の教育全般、また教育方法論や自閉児論など、もっと詳しく発表したいと思います。

〔編者注〕アスクミーについて

第一章でも触れましたが、アスクミーというのは、石井勲監修、日本リーダーズダイジェスト社製作･発売の“楽しい漢字”セット中の学習機械の名前です。

漢字カードをこの機械に差し込みますと、カードに録音してあるので、この器械がその漢字を読んでくれます。子供に読めない漢字を教えてくれる機械だということで Ask me と名づけたものです。

なお、録音装置を備えたアスクミーもあって、これを使いますと、必要な漢字カードが簡単に作れるようになっています。